

時をのせて都電がはしる

大多 和家



先日よく晴れた午後ふらふら歩いて近くの飛鳥山公園にいった。日の光をいっぱいにあびて、子供がおおぜい遊んでいる。そのかたすみに古い都電がおおいてあった。なにげなく説明の板を見ると、郊外電車から始まり都電になった歴史の説明とともに、都電に乗って遊ぶときの注意がまとめてあった。

酒気をおびて乗ってはいけない、危険物を持ち込まない、人に迷惑をかけない、六歳以下の幼児は親がついていること、などが教育委員会の名で示されていた。これをぼんやり読みながら、しだいに真顔

になっていく自分にきづき、「まだ都電に乗れないな」と思った。

私ごとになるが亡父は、都電が全盛の昭和三十年代には、王子から日本橋までの19番線の運転士をしていた。その後、都電はしだいにバス、自動車、地下鉄にとつて替わっていったが、父は最後まで残って荒川線で運転を続け昭和五十年に六十歳の定年退職を迎えた。小学校のとき親類の子が田舎から上京すると、一緒に運転席にいらしてもらい、二度も三度も王子と日本橋を往復したこと。妹と一緒に小学生

当時大流行した“だっこちゃん人形”を買いに日本橋のデパートに朝早く並びに行ったときに、デパートの前で特別に停車してくれたこと。夏になると土用の丑の日に毎年きまって、母の好物であった鰻を日本橋の“登亭”で買ってきてくれたことなどを、とりとめもなく思いだしていた。

19番線が廃止になるとき、すでに大学生になっていたと思うが、連日のように大勢の父の仲間が家に集まっていた。ときには酒を呑みながら、夜おそくまでわいわいと、なにやら議論していた。労働組合の支部役員をしていたのと、19番線の駒込営業所から家が近かったため、たまりばにしていたためと思われる。今になってようやく、何を話していたのか想像できるようになった。仲間達はそれぞれ、都バス、都営地下鉄、区役所、図書館、都清掃局などにちりぢりに別れていった。最後まで運転を続けた父の唯一の自慢は、無事故で定年を迎えたことで、自動車は免許も取らず決して運転しなかった。息子夫

婦の運転する車には必ず助手席に乗ったが、乗っている最中に、注意らしいことを言ったことはなかった。さぞかし恐ろしかったことと今になって思う。ただ一つ運転で注意したのは、スムーズに加速して発車し、停車もスムーズにしかも目的位置にピタリと止めることであった。確かに父の運転する都電はなめらかで、乗っていて衝撃を感じることはなかった。

その父が大腸癌で昭和六十一年に入院した。本人には明らかに言わなかったが、うすうす感じていたと思う。見舞いに行くとよく、「お前は人の気持ちに分からない」、と声の出る最後までよく言われた。その時は、「病気で苦しく大変なんだろう」と思っていた。最近になって、「人の気持ちが分からない」、意味がすこしずつ分かってきたような気がする。しかし今でも、正直なところ、『人の気持ち』、は分からない。何が正しい天の道であり、何が『人の気持ち』に基づいた人の道だか分からない

い。そして悩んでここ数年間があつというまに過ぎ
てしまった。

今日は、酒をのんで酔っていることもないし、危
険なものも持っていない。またいちは成人して
いるので、人間に迷惑さえかけなければ、保護者が
いなくても都電に乗れる。そこで、飛鳥山公園を出
て、東京で一本だけになってしまった都電荒川線に
むけて、ぶらぶらと歩き始めた。日はまだ高くさん

私と子どもたち

杉野 恵

さんと照っている。王子駅について、ここちよい緊
張とおごそかな気持ちで乗車した。乗りながら、今
年の父の七回忌のときは子供達であつまり、散歩で
もしながら、都電に乗ろうと思った。考えているう
ちに二駅が過ぎて、家の近くの駅でおりました。私に
とって、都電は時間をのせて毎日ほしり続けてい
る。次は自分の子供を連れて一緒に都電に乗ろう。

(電気メーカー勤務)

